

3万6千人が受検、“社会人基礎”の3級が堅調

＝平成30年度第1回日本語検定＝



日本語の総合的な能力を測る「日本語検定」（略称・語検）の平成30年度第1回（通算第23回）検定が、6月8日（金）と9日（土）に行われました。国内は47都道府県84カ所の一般会場と610カ所の準会場、海外はアメリカ（グアム）、イタリア（フィレンツェ）、韓国（ソウル）の3カ国3カ所で実施され、3万6075人が受検しました。

「語検」は、敬語、文法、語彙（ごい）、言葉の意味、表記、漢字一の6つの領域にわたり、日本語を正しく使うことができるか、一人ひとりの能力を測るものです。1級から7級まで、小学生から社会人まで幅広い年齢層を対象としています。検定結果は、7月上旬に語検ホームページで合否速報が発表され、個人カルテと認定証が郵送されます。

今回の受検者数は、1級（社会人上級レベル）594人、2級（大学卒業～社会人中級レベル）2881人、3級（高校卒業～社会人基礎レベル）1万8787人、4級（中学校卒業レベル）7017人、5級（小学校卒業レベル）2082人、6級（小学校4年修了レベル）1278人、7級（小学校2年修了レベル）3436人。前回と比べて合計で1割減ったものの、高卒程度の3級が2割増え、小学校低学年の7級が2・5倍と大幅に増加したのが特徴です。

語検事務局によると、3級では学習塾に通う中・高生が増えており、「どんな問題を解くにも日本語力は必要ということでは」と受検対策を兼ねた“理解力”の向上を目指したものと推測しています。受検者総数が伸び悩む中で、「社会人基礎レベル」となる3級の受検者数は、ここ数年増加傾向を示しており、中・高生から社会人まで幅広い年齢層の“期待”を集めて堅調に推移しているとみられます。

7級が伸びたのは、「（大学に在籍する）留学生が増えていることが最も大きな要因」としています。少子化の影響で中長期的に受験者数が減少する中で、留学生の受け入れに大学が力を入れていることが背景にあるとみられ、今後の推移が注目されます。

最年長者は4級を受検した福井県の93歳の女性、最年少者は7級を受検した神戸市の小学校に通う6歳の女の子でした。

◆ 693人が受検＝東京23区会場

東京23区の一般会場となった新宿区の東京富士大学では、午前と午後に分かれて合計693人が1級から7級にチャレンジしました。

梅雨の晴れ間の太陽が照りつける中、半そで姿の受検者が多く、日差しを避けるように足早に会場の校舎に向かう女性も目立ちました。検定が始まる1時間前には、教室の扉が開いて入場。着席すると筆記用具を点検したり、問題集を開いたりする姿があちこちで見られ、緊張ムードに包まれていました。教室の大きさに合わせて30～90人ずつ、級ごとに分けられた会場では、開始15分前に監督者から注意事項の説明があり、受検者は静かに耳を傾けていました。



◆ 仕事で、進学で問われる日本語力

受検の動機などをうかがいました。最初は2級の会場です。

社会人になって間もない杉並区在住の女性(23)は、人事・採用担当部署に配属され、「仕事で文章を書くことが多い」ことから日本語力を確かめようと語検に初挑戦。故郷・岩手県の中学の授業で語検と出会い「敬語や漢字などが面白いと思った」のをきっかけに、高校や大学でも文章力を磨いたことを話してくれました。

荒川区の高校3年の男性(17)は、工業高校でコンピューターのプログラムづくりなどを学んでいるものの、「人と話すのが好きな自分には合わない」と大学では商業系学部に進むことを目指し、「受験に役立つから」と臨んだ初めての語検。「コミュニケーション力があるサラリーマンになりたい」と将来に期待を膨らませていました。

◆ 社会人としての“最低限”

メーカー(製造業)で営業職を務める文京区の男性(46)は、「社会人として最低限の日本語をマスターしたい」と2度目のチャレンジ。2級を持っている「勉強好き」の奥さんに触発されて、初めて語検に臨んだ前は準2級にとどまったとのこと。文章はパソコンで書くのが当たり前となっている今、「漢字や熟語を間違えることが多くなった」と日本語力の低下に危機感を抱いていることを率直に話してくれました。



◆ 「正しい言葉遣い」お孫さんにも

4級の会場では2人にインタビュー。文京区の小学4年の女の子(9)は6級からのレベルアップを目指しての受検。週末に学校で開かれた親子学習イベントで語検を知り、受検するのは4回目か5回目という。神妙な表情で「敬語とか、漢字とかは難しい」としながらも、何度も挑戦している理由を聞くと「テストが好き」と即答、好奇心を垣間見せるように目を輝かせていました。

7級からスタートして4回目のチャレンジという墨田区の女性(72)は、中2から幼稚園年長までの4人のお孫さんに「勉強する姿を見せよう」と数年前に受検し始めたものが、今では「自分の日本語を見直すため」に受検し続けているという。お孫さんたちは「小学校に入ると、すごい言葉を使うようになる」そうで、正しい言葉遣いを「自信を持ってアドバイスしたい」と昇級に意欲を見せていました。

◆ 授業を理解する基本は

6級の会場では、母親の勧めで初めて語検にチャレンジする品川区の小学6年の女の子(11)と付き添いのご両親に話をうかがいました。語検を知ったのは夏休みに東京・霞ヶ関の中央省庁で行われる「子ども見学デー」で文部科学省を訪問したときのこと。検定ブースで「にほごん」(語検のキャラクター)の縫いぐるみと出会い、検定の中身にも興味を持ったという。母親は「娘は読書が好きだけど、どれぐらい学校の授業を理解しているのだろう」と考え、受検を勧めたとのこと。正しい日本語を知らないと授業も十分には理解できないという訳だ。



(時事通信社編集委員 升谷昇)

次回
予定

文部科学省後援事業 日本語検定 平成30年度 第2回(通算第24回)

一般会場 11/10(土) 準会場 11/9(金)・11/10(土)

申込期間 8/1(金) ~ 10/12(金)